

④6 年内立春 (2)

嘉永二年己酉春

世笑生書 印

ちとの間を我
空にして初鴉
光りあらはに
みゆる日の春

西馬
桃人

④6 年内立春 (1)

年内立春

せはしさに立紛れなし冬の春

白亥

疊にあまる餅花のかけ

西馬

広蓋にかさる産着を透見して

桃人

はれた咄しも声をひそむる

ミき越

白々と四手のひらつく穗屋の月

馬

こほれこほる、露の賑ひ

亥

翌日をまつ

白布

片相手なり

白布

除夜の梅

ミき越

行と来る

ミき越

年の間に

ミき越

たつ身かな

ミき越

ひとむかし

桃人

過たこ、ちや

桃人



庭掃除

梅の苔も

ミき越

こほすらん

紙に粲を

白亥

分ていた、く

憂事を覚えて

白亥

かさす袖袂

桃人

根岸をもとる

馬

うす暮の月

大海も御降すみし光りかな

白亥

花のさた咄しなからやえ方道

乙年女

二度逢は人にも去年とことし哉

桃人

④6 年内立春 (3)

海苔にはや春のあふる、色香哉

ミき越

あた、かにたつ膝の日埃り

白亥

猿引の隙を費す関の戸に

西馬

伊豆て貰ひし扇みせ行

桃人

水飯の施し仕舞夕月夜

亥

まちこかれたる雨のはらつく

越

八重よりもふかくはならぬ霞かな

西馬

久かたや黄鳥の音も明わたる

白布

色もまた薄けしき也花すみれ

乙年女

見ふるして新らしくみる柳哉

桃人

戊午春

鴈波書

